

はじめに

労働組合への不信、政治への過剰な期待

いつまでたつても楽にならない、つらい仕事、貧しい暮らし。転職しても変わらない。怒り、あきらめ、先が見えない不安が日本をおおっている。

こんなときこそ労働組合が頼りになるはずではないか。労働組合は、貧しい虐げられた者たちが身を守り、生きるために闘う武器だったはずだ。世界を見渡せば、労働組合は今も働く者にとつて、なくてはならない支えとして存在しつづけている。

だが今の日本では、多くの人にとつて労働組合は縁遠いものだろう。何をしているのかわからない。メディアをつうじてその存在を知らされるのは、何かの反対運動をしているときと、春闘で大企業の賃上げが報道されるときぐらいだ。貧しく不安な生活をかかえている人々に、労働組合は役に立ってはいない。

現状はそうでも、苦しい状況を乗りこえていく力になるのは、労働組合をおいて他にない。ところが多くの人は、生活が苦しいのは政治のせいであり、政治さえ変えればよくなると思

つている。政党も、政治を変えれば世の中がよくなるかのように喧伝する。政治を変えるのが政党の役割だから、そう主張するのも当然かもしれない。

しかし、労働者の働き方を変えられるのは、政治家でも、官僚でも、裁判官でも、警察でもない。労働組合なのだ。

なぜなら、社会には社会のルールがあるからだ。働き方は、労使自治というルールにもとづいて決められる。労働組合と経営者が交渉し、話し合いで決めるのだ。その取り決めこそが社会の根本である。政治が決める国の制度はその後にくるものだ。現在は絶対主義の時代でもないし、日本は専制国家でもない。労働者の働き方は国家の権力が決定するのではない。労使が交渉し、対立し、そして妥結する。この労使自治のフィールドでこそ働き方は決められる。

そこで重要なのは、この勝負を決めるのは労使の実力にかかっているということだ。日本では労働組合の力は極端に弱い。だから経営者のやりたい放題になっている。

それではなぜ弱いのか。労働組合の力の有無は、闘う意欲の問題ではない。実力の弱さの根源には、そもそも日本の労働組合が「本当の労働組合」ではなかったことにある。この本では、この「本当の労働組合」とそれを形成するエネルギーをユニオニズムと呼ぼう。

実は「本当の労働組合」の「種」は、戦前の時点で日本にもち込まれていた。だが、その花を咲かせることはできなかった。戦後になり、その「種」は日本の土壌で育つうちに、やがて

世界では見ることもない土着の花を咲かせてしまった。その花が旺盛に咲いた時期もあった。だが、それは咲いても咲いても実を結ばない「あだ花」だった。やがてその花もしぼんでしまった。この土着の花こそ企業別労働組合である。

それならば企業別組合の過去を清算して、新たに「本当の労働組合」＝世界標準の産業別組合をめざせばいいはずだ。しかし、戦後日本の労働運動は企業別組合と決別することができなかった。なぜかという点、企業別組合は、年功賃金と終身雇用制とともに、日本的労使関係という雇用システムを支える柱だったからだ。

このシステムのもと戦後の労働と生活は、年功賃金によって賃金は黙っていても定期的に上がった。終身雇用制によって雇用も定年まで守られた。自分の会社さえ発展すれば生活は安心できる。これが、会社人間と呼ばれる人々の働き方だった。

しかし、会社人間としての暮らしはほんとうに幸せなものだったのだろうか。過労死・過労自死、単身赴任、父親不在の家庭など、あまりに多くの問題をかかえていた。人生のエネルギーをすべて会社に吸い取られ、孤独な老後を送っている元会社人間も多い。

だが、肝心の年功賃金と終身雇用の時代はもう過ぎ去ってしまった。経営者は、長期にわたる景気の後退と雇用の悪化に対応して、二〇〇〇年代から、日本的雇用慣行をほとんど捨ててしまった。経営者の方が過去と決別したのである。その結果として出現したのが、若者や女性

を中心にした貧困と過酷な労働、雇用不安といった悲惨な状態だ。この事態を前に、古い企業別組合は、どう対処したらよいのかわからず立ちすくんでいるかのように見える。

歴史から現在の実践へ

では、どうすればよいのか。先に進むことだ。日本的雇用慣行に代わる新しい働き方と暮らし方を構築することが急がれている。

そのためには、日本とは違う別の世界を知ることが大切だろう。ヨーロッパ社会を眺めてみると、そこには「本当の労働組合」を生み出したユニオニズムの伝統が古くから根を下ろしている。日本とはまったく異なる穏やかな働き方と、質素ではあるが豊かな暮らし方がある。移民や失業者が増え、新自由主義の攻撃によって大きく揺らいではいるが、産業別労働組合と福祉国家の大柱は崩れていない。

賃金は年齢や勤続、男性・女性、雇用形態にかかわらず、職種・職務など就いている仕事で決まる。賃金が毎年上昇することはないが、家族生活を営めるだけの基本給が支払われる。普通の人はきちんと仕事さえしていれば、いちいち人事査定されることはない。仕事は、限定された職務を、決められた労働時間のなかでこなせばよい。日本のように、職務があいまいで際限のない労働を強いられることはないので、過酷な労働や、まして過労死・過労自死とは無縁

だ。大幅な残業がないので、家族そろっての夕食が当たり前になっている。年間の休日もたくさんあるので、みんなバカンスを楽しんでいる。

戦後つづいてきた企業頼みの生活、企業に縛りつけられた労働、家族を犠牲にした暮らし、それらから解放され、自分の人生や仲間を大切にす。日本における産業別組合の創造とは、このような暮らし方を実現することを意味している。

本書は大きく三つの柱に分かれている。

第一は、労働組合の理論を歴史のなかからつかみとる課題だ。この国はユニオニズムの歴史をもっていない。ユニオニズムを生み出す土壌となつた中世ギルドの伝統もない。そのため、まずは「本当の労働組合」がどのように生まれたのか、その歴史をたどる必要がある。

第二は、ユニオニズムの理論をつかみとる課題である。労働組合の目的と機能、方法を考えしていく。その理論は、労働組合運動の長い歴史から導きだされた原理であり、だからこそ普遍性を持ち、したがってこれからの運動の羅針盤になるだろう。

第三は、「労働組合の未来」を構想することである。どのようにして「本当の労働組合」を創るのか、その創り方について検討していく。企業ごとではなく、業種や職種を枠組みとしたさまざまな労働組合に、労働者が個人として参加していくという姿をイメージしてほしい。

日本でユニオニズムの花を咲かせることは想像を絶するほどの難事業だ。それでも歴史に学

び、理論に導かれ、日本の現状に適用すれば、やがてなすとげることができるだろう。本書は、これから日本で「本当の労働組合」の種を蒔き、育て、花を咲かせる、その歴史的な挑戦のための手引書である。